

4【うつぼ】

あるとき、大酒のみの村長が、酒壺（さけつぼ）にすいこまれた、という噂が、村中にながれました。

よほどおおきな酒壺だったのかとおもったら、蛸壺（たこつぼ）くらいだという。

のこりの酒をしらべようと、酒壺の口から中をのぞいていたら、すいこまれたのだという。

それなら村長は酒壺の中で酒を飲んでいるんだろうとおもったら、泳いでいるとか、溺（おぼ）れているとかいう。

泳いでいるのと溺れているのでは、まったくちがうけれども、なにせ酒壺の中は、くらいからよくわからないのだという。

とにかく、懐爺をたよりにするしかありません。

ぼくは村を代表して、(代表した気分になって) 懐爺のところに行きました。

懐爺は苦笑いしながら、すぐにこういったのです。

「【うつぼ】にやられましたね」

「【うつぼ】たあ、あのおっかねえ、さかなか」

「魚ではありません。【うつぼ】を漢字で書くと空です」

「たこつぼは、そらほど、おおきくはないのう」

「空とは、から。つまり、からつぼ。からつぼの酒壺にいたずらしたので、【うつぼ】のおぼけにやられたのです」

「【うつぼ】たあ、おぼけか」

ぼくはあきれました。

「村長も、よけいな事をしたものです。酒がのこっているかどうかは、ふってみればわかるでしょうに」

懐爺もあきれていました。

「そんちょうに、たこつぼは、ふれん」

「それなら若い者に、ふってもらえばいいのものを」

「そんちょうは、わかいもんを、しんようしとらん」

「若い者を信用しないで、よく村長がつとまりますね」

「そんちょうは、やさしいからのう」

「そういうやさしきは、ほんもののやさしきではありません」

懐爺は、すこしこわい顔をしています。

「むずかしいことというのう。わしはそんちょうを、すくいたいんじゃ」

「それなら心配いりません。金ちゃんが帰るころには、村長も酒壺の旅からおもどりのことでしょう」

それならと、ぼくは帰りました。

たしかに村長は、酒壺の旅からもどっていました。

門のところから家をのぞいていると、村長はとても赤い顔をしていました。

ぼくのいるところまで、酒臭さが、ながれてきていました。

村長は、助けてくれた村の若い者らを、ねぎらっていました。

しかし、あとできいたら、たいした努力はいらなかったらしい。

酒壺を、たたきわっただけだったから。

村長は酒びたしになって、

「もう酒はこりごり」

と、大声で宣言（せんげん）したらしい。

でも翌日から、また酒を飲みはじめたらしい。